令和６年度　学校経営計画・自己評価書

足立区立栗島中学校
校長　　豊 崎　努

１　学校教育目標

人権尊重の精神を基盤とし、規範意識と豊かな個性、創造力をもって社会に貢献しようとする精神を培い、心身ともに健やかで夢や希望を実現する自立した人を育てる教育を推進する。
・進んで学ぶ生徒　　・思いやりのある生徒　　・根気強くやりぬく生徒

２　めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	・自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力(人間力)を育成する学校 ・学ぶ力、確かな学力を身に付けさせ、心豊かな生徒を育てる学校
○児童・生徒像	・進んで学ぶ生徒　・・　自ら学び、ひとから学ぶ。豊かな人間関係を築き、自分の個性や特技を伸ばす。 ・思いやりのある生徒　・・　互いに支え、協力し、思いや考えを共有する。自分と等しくひとを大切にする。 ・根気強くやりぬく生徒　・・　努力することの価値を認め、自分を信じて向かい続ける。
○教師像	・授業を大切にし、自ら学び続ける教師 ・保護者や地域に信頼される教師

３　学校の現状及び前年度の成果と課題

【学校の現状】
・授業は比較的落ち着いた雰囲気であり、生徒は真面目に授業に向かっている。家庭学習の習慣を身につけることができず学力が定着しにくい。
・保護者や地域は学校教育に理解を示し、協力的である。
・英語において、習熟度別少人数指導による授業展開を実施し、学力の定着と向上に取り組んだ。
【生徒について】
＜成果＞
・規範意識を高くもって学校生活に積極的に関わっており、生徒会活動、委員会活動、部活動に積極的に取り組んでいる。
・「立志の時間」（総合的な学習の時間）での調査・研究・発表を通して、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を身に付けた。
＜課題＞
・主体的に学習に取り組む意欲が低い生徒が多い。家庭で自ら学習する習慣が身についておらず、学習内容を定着させられない生徒が多い。
・読書習慣のある生徒が少ない。読解力や想像力が十分に育っていない一因と考えられる。
・真面目ではあるが、目的意識や自ら解決しようという意欲が低く、大人の指示を待つ、指示に頼ろうとする傾向がある。
【教職員について】
＜成果＞
・新学習指導要領の実施に向けて「生徒の主体性を生かした授業改善」「生徒に考えさせる授業作り」「評価と指導の一体化」について研修を深めた。
・生活指導においては、校内支援委員会及び生活指導部会を基盤に支援と指導の両面から全教職員共通理解のもと、組織的に生徒の課題に対応した。
＜課題＞
・若手教員が半数を越え、経験の少なさを熱意で補っている状況である。
・ベテラン層や中堅層が少なく、意図的・計画的で組織的なＯＪＴの実施、研修の運営など、授業改善のための教員の資質向上の取組に難しさがある。
【地域、保護者について】
＜成果＞
・開かれた学校づくり協議会やＰＴＡが中心となって、花壇の整備等、学校環境整備がなされた。
＜課題＞
・学力向上のためには自ら学ぶ意欲が重要であることを家庭と共有する。家庭学習の定着に関して、家庭との協力体制を構築し、推進していく。

4　重点的な取組事項

	内　　容	実施期間（年度）　R:令和				
		R4	R5	R6	R7	R8
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	生きる力を育む教育	○	○	○	○	○
3	思いやりの心や豊かな心を育む教育	○	○	○	○	○

5　令和６年度の重点目標

重点的な取組事項－１	学力向上アクションプラン

A　今年度の成果目標	達成基準 （目標通過率）	実施結果 （通過率結果）	コメント・課題	達成度 ◎○△●
基礎学力・学ぶ力の向上 ・生徒の主体性や思考力を育成する授業づくり（栗島中授業スタンダード）を確立し推進する ・目指す生徒像の共有を基盤に、カリキュラムマネジメントの視点からの全教育活動をとおして生徒の学ぶ力を育成する	・目標通過率：50% ・正答率：当初 50% 確認テスト（２月）55% ・独自に設定する生徒への意識調査を年３回実施し、肯定的評価を年間通して向上させる ・教員向けアンケートを実施し、年間を通して取組状況と成果値を向上させる	・通過率　：　54.2% 正答率：当初 56.7% ・確認テスト（２月） 正答率　：　43.0% ・肯定的評価 88.6%→85.6%→89.2% ・教員アンケートでは、足立スタンダードに沿った授業づくりを全員が行っている。	○通過率・正答率は、全学年ともに 50%を超えたが、大きな学力差が本校の課題である。 ○小中連携も通して「目指す生徒（児童）像」のイメージが共有できたことで、「全教育活動を通した児童生徒の育成」という視点を共有できたことは成果である。	△

B　目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 （誰が、何を、どのように）	達成確認 方法	達成目標 （＝数値） （いつ・何を・どの程度）	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	「考える授業」「問いをもつ授業」の実施	全学年 全教科	通年	生徒各自が授業のめあてと解決策を意識できるよう、主体的に考え対話的に考えを深める場面を設定する。授業の最後に各自が身につけたものを振り返ることができる力を目指し、学習調整力を育てる	生徒意識調査 教員向けアンケート 評価・評定の「主体的に学ぶ態度」	○最終調査の数値が当初の数値を５ポイント上回る ○中間調査の数値を指導改善に生かす	○生徒調査 76.5→76.8→80.4 ○教員調査 95→100→100 ○中間調査の結果を全教員が共有し、具体的手立てを立てた	○授業の中で、自然に「問い」が投げかけられている。考える場面が増えたことで、生徒の授業に対する意欲が伸びた。	○

2 新規	「振り返りの時間」と「まとめ」の充実	全学年 全教科	通年	授業の最後に各自がこの時間で何が分かったか、何が分からなかったかを個人で振り返らせる。全体のまとめと個人の振り返りを通して学習調整力を育て、家庭での自主学習につなげる。	生徒意識調査 教員向けアンケート 評価･評定の「主体的に学ぶ態度」	○最終調査の数値が当初の数値を５ポイント上回る ○中間調査の数値を指導改善に生かす	○ねらい・まとめ 生 77.4→73.4→81.6 教 90.0→100→100 ○中間調査の数値を全教職員が共有し、振り返り、まとめのあり方を検討した	○学習単元ごとに、どのような「ねらい」の提示や「ふりかえり」の方法が効果的かを、教員が教科をこえた情報共有した。	○
3 継続	学力アップ （朝・放課後）	全学年 朝：読書 午後：国・数・英・社・理	毎日	年間計画に沿って読書習慣と基礎学力の定着を目的に、学習コンテストに向けた課題や、ＡＩドリル活用などを通して、個に応じた課題に取り組ませる。	ＡＩドリル活用数 学習コンテストの結果	○ＡＩドリル活用数、月あたり３００問 ○学習コンテストの目標値達成	○ＡＩドリルの活用は十分でない ○学習コンテストの目標点達成率は 90%をこえた	○読書活動は落ち着いた一日の始まりのためにも有効である ○ＩＣＴ機器を文房具として有効に活用する	△
4 継続	学習コンテスト	全学年 ・国語 ・数学 ・英語 ・社会 ・理科	実施日 3 週間前より放課後の学力アップタイムを活用	各教科が、基礎知識の定着度の確認などコンテストの目的を定め、出題を吟味して実施する。 各教科で各生徒が自分の力に応じて目標点を定め、生徒自身に各自の目標点を設定させて取り組ませる。 採点を生徒各自が行い、自己の課題を見出させる。	漢字：７月 計算：12 月 英語：10 月 社会：１月 理科：２月 目標値を実施前に立てさせプレテスト後に修正させる	○全生徒が根拠をもって目標値を立てられる。見とり方は教科が検討する ○各自が定める目標点に達する生徒が 80%以上	○特に 2.3 年生は、前年度の自分の得点と教科担任からの情報を手立てに目標点をたてられた。 ○当初たてた目標点をプレテスト後修正した数値の達成率は各教科 80%をこえた	○目標点をたてること、プレテストの結果で目標点を修正することを、根拠をもって進めさせた。最終的な得点からの振り返りによって、「学習を調整する力」を意識させた	◎
5 継続	サマースクール	全学年 ・国語 ・数学 ・英語 ・社会 ・理科	夏休み ７日間	当該年度の前半期でのつまずきを解消できる力をつけるため、少人数指導のもと、学習への興味の喚起と、知る・分かる喜びを感じさせ、学習意欲の向上を図る。	事前、事後のアンケートで生徒自らの意欲や達成度の変化を見取る	○生徒自身が振り返り、学びたいものが学べた、自ら進んで取り組んだなど肯定的評価が９０％	○サマースクール参加生徒全員が「参加して良かった」「“わかった”があった」「楽しかった」と答えた	○学習活動への興味関心を伸ばすことで学習意欲を伸ばすことを目的に行った。	◎

重点的な取組事項－２	生きる力を育む教育

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
・生徒の主体性を生かした取組の充実	・生徒アンケートにおいて、主体的な取組に関する問いに対して、肯定的評価を８５％以上にする。 ・各取組についても評価する。	・肯定的評価 83.6%→83.5%→86.4 ・取り組みごとの評価（最高値） 例：運動会　96.3%	○生徒の「学校」への当事者意識は育っている。一層の取り組みの充実を図る	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
主体的に考えて取り組む態度の育成	・作文、振り返り、生徒アンケートでの肯定的評価が全体で９０％以上	・学校行事ごとに生徒の実行委員会を組織し、運営等に主体的に取り組ませる。 ・生徒主体で生徒会朝礼、学校紹介、部活動体験などを企画・運営させ共有させる。	・実行委員・生徒会役員の肯定的評価　100% ・生徒全体での達成度　90.7%	○行事ごとの生徒実行委員会の活動が充実しており、「自分たちの行事」という意識を大切にできた。	◎
総合的な学習の時間（立志の時間）の充実	・生徒への振り返りアンケート、作文での肯定的評価が９５％、主体的取組が８５％ ・保護者アンケートで立志に関する項目で肯定的評価が８５％ ・教員向けアンケートを実施し評価する	・個人研究のポスターセッションで主体的な課題設定・解決、プレゼンテーション能力を育てる。 ・グループ発表を通して、対話的に課題解決をはかり、考えを深めさせる。 ・立志の時間で育てた能力を生かし、主体的に学習する態度を育てる。	・生徒の肯定的評価（振り返り）96.3% ・保護者の満足度（アンケート）90.6% ・教員の目標達成度（振り返り）88.0%	○目標値は達成しているが、数値に関わらず内容の充実を図ることを継続していく。 ○立志で獲得した生徒の力が、どのように「生きる力」につながるかという視点が重要である。	○
進路指導、キャリア教育の推進	・生徒への振り返りアンケート、作文での肯定的評価が９５％、主体的取組が８５％ ・教員向けアンケートを実施し評価する	・職場体験、上級学校調べ・学校訪問等を行い、将来の夢や希望を広げる。 ・東京都英語村 TGG（TOKYO GLOBAL GATEWAY）での体験活動を実施する。 ・食育、保健指導、歯科指導を行い、自らの健康に関する意識を高める。	・生徒の肯定的評価（進路学習）96.7% ・生徒の肯定的評価（主体的）88.4% ・教員の肯定的評価 98.0%	○「自分の将来」を意識し、今をどうとらえ、どのように努力して生きるかという考え方をさせることが極めて重要である。学校教育全般をとおして進路・キャリア・健康教育を進める	○

重点的な取組事項－３	思いやりの心や豊かな心を育む教育

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
・人権尊重意識の向上 いじめの根絶・自己肯定感の伸長	・生徒の感想文や人権に関するアンケートを実施し９０％以上の生徒が人権意識を高めたと回答する。 ・生徒アンケートにおいて、学校生活の満足度等の肯定的評価を９０％以上にする。	・人権アンケート肯定率　100％ ・学校満足度 1年 86.6→92.6→90.4 2年 92.4→84.0→88.0 3年 78.2→83.1→90.6	○自分を大切にできることで一層他者を思いやれる、という仮説を立て、「自己肯定感」の育成を大切にしてきた	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
人権尊重意識の向上（いじめの防止と根絶）	・全ての生徒が人権課題を意識し、自分なりの考えをもっていることを生徒アンケートや作文から確認する。 ・生徒の課題に組織的に対応し、解決の方向性を確認できている。（校内支援委員会、生活指導委員会、学校生活アンケート等）	・学校生活アンケート、いじめアンケート、ＳＣや養護教諭、担任等の情報で生徒の課題をすばやくとらえ、組織的に対応する。 ・校内支援委員会、生活指導委員会を週１回実施し、情報を共有し、早期に組織対応していく。また、ＳＣやＳＳＷとの情報交換を密にし、計画的な支援を行っていく。 ・教育相談週間を設定し、全生徒と教員との面談を実施し、一人一人に寄り添った生徒指導を行っていく。 ・特別支援学級と運動会、フライングディスク、ビーチボールバレーなど積極的な交流を行い、共生を通して人権感覚を身につける。	・校内生徒支援委員会と生活指導部会を毎週開催し、相互に連携しながら、支援と指導の二面から生徒の情報を共有し、対応策・支援策を迅速に検討した。 ・各会議記録を校内共有フォルダで共有するとともに、更新の告知を行い、全教職員での共通理解を進めた。 ・教育相談週間で、一人一人の思いや言葉を肯定的に聞き取り、困り感に寄り添ってもらった安心感を生徒に与えられたと考える。 ・学校行事で特別支援学級を含めた実行委員会を組織し、仲間意識の中で行事づくりを進めた。	○校内生徒支援委員会と生活指導部会の密接な連携を今後とも継続し生徒の支援に生かす ○「教育相談」という取組の目的や意義を毎年確認し共通理解を深めることで、生徒にとって安心な人間関係を構築していく。 ○教職員の人権感覚を陶冶することを第一にして、誰もが安心して生活でき、仲間意識をもてる学校づくりを進める。	○

豊かな心の育成	・学校・学年行事、道徳授業等の感想で、多くの生徒が思いやりの心や他者を認める感情が高まったことを確認する。	・全教員のローテーションによる道徳の授業を実施し、全教員で道徳に関わりをもち、計画的に道徳教育を推進していく。 ・地域行事やＰＴＡ行事、ゆめはなプロジェクト（花壇づくり）などに多くの生徒が関わり、地域の一員としての自覚を培う。	・道徳の授業での教師のローテーションにより、生徒には柔軟な取り組み姿勢が身についた。ＩＣＴを活用することで、言葉にできない生徒の思いを共有できた。 ・地域と連携して、ゆめはなプロジェクトの実施、町会スポーツ大会の運営を行い、地域の一員としての自覚をもたせた	○ローテーションでの授業を継続し、様々な考えや考え方に触れさせる。 ○ＩＣＴ機器を活用することで生徒全員の思いを共有する。 ○地域との連携を通して多くの大人に見守られる安心感を与える。	○
自己肯定感の伸長	・「自己肯定感」及び「自己有用感」「自己効用感」の育成を目指した取組と生徒の実感に関するアンケート	・学校教育活動のあらゆる場面で「自分を知る（自己肯定感）」「やればできる（自己効用感）」「自分は役に立っている（自己有用感）」という感情を伸ばすことを指導目標の一つとする。	・自己肯定感等の肯定的評価 1年　85.4→83.7→87.2 2年　77.5→74.4→78.8 3年　78.5→83.0→88.6	○「自己肯定感」「自己有用感」「自己効用感」のとらえ方を整理したことで、生徒の感覚の育成場面がイメージできてきた。	○

６　まとめ

（１）今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

◎今年度の成果と課題

○「考える授業」「問いをもつ授業」により、授業に向かう生徒の姿勢が変わり、積極的・意欲的な生徒が増えた。

○学習コンテストでの「目標点設定→プレテストを終えて目標点修正→コンテスト結果の振り返り」の活動により、自ら目標やねらいを意識して学習に向かう態度が身についてきていると感じられる。

○区学力調査の通過率、正答率の向上をひとつの目標とし、生徒の学習に向かう姿勢、学習を調整する力、１点でも高い得点を取ろうという意欲と取れるという自身をもたせ、「自ら学ぶ力」の育成を通して、未来に役立つ「真の学力」を見据えた教育活動を展開することが重要である。

◎次年度への方向性

○生徒主体の授業の充実

・「考える授業」「問いをもつ授業」をさらに充実させ、生徒一人一人に「問いをもつ（課題を見つける）力」「自ら考える習慣」を身につけさせ、「できた」「分かった」を増やすことで、学習が「自分ごと」であると捉えさせる。

・様々な形態での話し合い活動を通して、自分の意見を「伝える力」、伝えるために意見を「まとめる力」、他者の意見を「聞く力」、他者の意見を生かして自分の「考えを深める力」を育てていく。

・こうした活動を自らの力で行っていくために、基礎・基本の定着を繰り返し確実に行っていく。

○個に応じた指導の充実

・一斉授業の充実を図りながら、場面や展開ごとに生徒の学力や特性に応じた課題を提示し、授業の複線化を目指す。

・本校の特徴である「一人一人に寄り添った指導」を学習面でも推進し、各教科の学びに生かせるよう全校体制で取り組んでいく。

○立志の時間を核とした教育活動

・本校の教育活動の特徴である「立志の時間」では、課題発見能力・課題解決能力・プレゼンテーション能力の育成を図るとともに、コミュニケーション能力と自己開示力を高めている。
この力を学習にも生かすという視点で授業を見直し、「立志の時間」で生徒が身につけた力を生かせる工夫をさらに取り入れていく。

○ＩＣＴ機器の有効な活用

・ＩＣＴ機器を学習ツール（文房具）として、教師・生徒ともに活用を進めている。ＩＣＴ機器の活用の目的は、生徒に多様な学び方を通して自ら学ぶ姿勢を身につけさせることである点を教師が共通認識し、生徒の視覚に訴え体感的に理解を進める活用、ＡＩドリルでの復習、検索機能による知識取得、プレゼンテーションソフトによるまとめのほか、コミュニケーションのツールとして活用していく。

○小中連携の充実

・栗島小学校、栗島中学校の１小１中連携の強みを生かし、令和５年度には児童生徒の実態と課題の把握を基盤にした連携を進めた。これにより小学校入学時から中学校卒業時までの児童生徒の９年間の学びのイメージを共有することの重要性を認識できた。令和６年度には児童生徒理解に基づいて「ねらい」「ふりかえり」「まとめ」を中心にした「足立スタンダード」が生きる授業づくりを進めたことで、児童生徒が「主体的に学ぶ」という姿を共有しながら連携を進めた。これまでの実践をさらに充実させる。

（２）保護者や地域へのメッセージ

○継続的な校則の見直し

・「校則は守るもの」が基本であり、守ることを通して規範意識を育てることを重視しつつ、不合理なものや、現在の環境にそぐわない校則は、生徒と教師がそれぞれの意見を尊重しつつ見直しを続けている。このことで生徒各自が学校生活の主体であり当事者であるという意識をもち、将来にわたる「主権者意識」を育てることを目指している。

○学校と家庭の連携

・生徒の生活の基盤は家庭であり、学校では多様な人々との生活の中で社会性を育てていくことが必要。不安定な思春期を生きる生徒にとって、家庭と学校の中で安心できるよう、相談・共有・連携しながら生徒を見守っていける環境を作っていきたい。

○指導と支援

・生徒の行動の背景には生徒の思いが隠されている。問題だと思える行動には、生徒が抱える困り感があると考えられる。「ダメ！」ということを教える（指導する）ためには、まず、その「困り感」に寄り添い、大人が一緒に解決策を考えてあげられるよう寄り添う（支援する）姿勢をもっていくことが必要だと考えて生徒を育てていく。

○ホームページ

・学校生活の様子や生徒の様子を、毎日ホームページで公開している。是非ご覧いただき、少しでも学校の雰囲気に接していただきたい。

（３）その他（学校教育活動全般について）

○健康教育、安全教育の充実

・「健全な精神は健全な肉体に宿る」ことを重視し、保健体育や部活動を通して身体の健康作りに積極的に取り組んでいく。
思春期の不安定な心に寄り添い、命と何かを問いかける生命尊重教育を推進し、自分が生きていることのすばらしさに気づける教育を進める。

○人権尊重教育の推進

・人権尊重に関する教育を通して、自己と共に生きる他者を尊重する意識をもたせる。他者の尊重を通して、他者から尊重される自己の存在を感

じさせ、他者との関係の中でも自己を尊重できる生徒を育成する。

〇多様性を受け入れる人間性の育成

・授業・特別活動・人権尊重教育を通して、人は一人一人が違い、違いがあることが尊いということを実感させる。自己が他者を認めることが、他者から自己を認めさせることにつながり、他者から認められるという実感から自己肯定感をもたせていく。

〇キャリア教育

・キャリア教育を通して、社会の未来と未来を生きる自分像を描かせ、将来に向かっての希望や期待、夢をもって生きる生徒の育成を目指す。自分が生きていくこと、働いていくことが社会貢献（他者のため）であるという自己効用感をもたせ、それを通して自己有用感、自己肯定感をもてる生徒を育成する。